

特別レクチャー「エコール・ド・パリのウクライナ人芸術家たち」

ヴィタ・スサク講演会

報告 前田和泉

本レクチャーは二〇一四年十一月二八日、科研費若手研究(B)「大戦間期ガリツィアのポーランド系ユダヤ人作家、画家の芸術思想的系譜とモダニティ」(加藤有子・名古屋外国語大学)、科研費基盤(A)「ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意味に関する超域横断的研究」(亀山郁夫代表・名古屋外国語大学)、および東京外国語大学総合文化研究所の共催により、研究講義棟二二六教室にて開催された。

ヴィタ・スサク氏はウクライナ国立リヴィウ美術館学芸員・リヴィウ大学准教授。エコール・ド・パリで活躍したウクライナ人芸術家たちをまとめた名著『パリのウクライナ人芸術家たち』(一九〇〇―一九三九年)(二〇一〇)は英語や仏語にも翻訳されて話題となった。本レクチャーではそのエッセンスを豊富な画像とともに紹介してくださった。

エコール・ド・パリについては今さら説明の必要はあるまい。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、世界中から様々な経歴と作風を持つ芸術家たちがパリに集い、多彩な活動を繰り広げた。旧ロシア帝国からもシャガールやスーティンを始めとする数多くの芸術家がパリへと渡ってきたが、その中には少なからぬ数のウクライナ出身者がいた。

Marie Bashkirtseff (1858-84) はその先駆的存在である。パリ

のアカデミー・ジュリアンで絵を学び、リアリスティックなタッチで人物や風景を誠実に描いて高い評価を受けた彼女は、結核のため二五歳で亡くなり、作品の多くは第二次大戦中に失われた。

二十世紀に入ると、多数のウクライナ出身者がエコール・ド・パリを彩ることになる。Alexandra Exter (1882-1949)・Volodymyr Baranoff-Rossiné (1888-1944)・Sonia Delaunay (1885-1980)・Alexander Archipenko (1887-1964)・Mykhailo Boichuk (1882-1937)・Alexis Gricenko (1883-1977)・Mykhailo Andrienko (1894-1982) など、とりわけ一八八〇―一九〇年代生まれには有力な芸術家たちが多く、まさにウクライナ美術の黄金世代である。それぞれに個性的な芸術家たちだが、スサク氏によると、ウクライナ出身者にはある共通性が見られるという。それは、「色、空間、誇張法」である。たとえば装飾的なExterの作品とDelaunayの抽象画、Baranoff-Rossinéのキュビズム作品、やや世代は下るがVassyl Khmeluk (1903-86)のフォーヴィズム的絵画は、いずれも鮮やかでダイナミックな色彩が目を惹く(ちなみにBaranoff-Rossinéは作曲家スクリャーピンに触発されて「色光ピアノ」を製作、実演したことでも知られる)。一方、Exterの空間構成とArchipenkoの彫刻作品には同種の無重力性

が感じられる。そして、どの芸術家にも表現上の大胆さと極端さが備わっている。

全体としては前衛性が強いこれらの世代の中で異彩を放つのが、ヴィザンティン美術を思わせる Boichuk である。地理的にギリシアに近いウクライナでは、ヴィザンティン美術はロシアよりも色濃くその影響を残しており（ロシアの画家ヴルーベリが美術アカデミー卒業後、キエフの教会修復に参加する中でヴィザンティン美術に触れ、独特のモザイク画風タッチを確立させたことを想起されたい）、Boichuk もまたそのような土壌から生まれた画家であった。ロシア・アヴァンギャルドはイコンやルボーク（民衆版画）などに着目し、プリミティヴィズム作品を多く生み出したが、言うなれば Boichuk は「ウクライナ・プリミティヴィズム」とも呼ぶべき存在だ。その非遠近法的構図や無表情な人物の顔が、どこか Archipenko の滑らかで顔のない人物彫刻との共通性を感じさせるのも興味深い。

ウクライナ出身者の中には Emmanuel Mané-Katz（1894-1962）、Chana Orloff（1888-1968）などユダヤ人も少なくなかった。スーティン、シャガール、モディリアーニを始め、エコール・ド・パリでは多くのユダヤ人画家が活躍したが、元々ユダヤ系住民の多いウクライナ出身の芸術家たちも、そうした「エコール・ド・パリのユダヤ人たち」の一角を形成していたのである。ところで、ウクライナがロシアから独立したのはソ連崩壊後の二十世紀末のことである。エコール・ド・パリ時代のウクライナは、帝政ロシア、もしくはソ連の一部にすぎなかった。では、その時代の芸術家たちを「ウクライナの」芸術家たちと一括りにしてよいものなのか？

レクチャー後の質疑応答においても、彼らのナショナル・アイデンティティーに関して多くの質問が寄せられた。そもそもウクライナは多民族、多言語、多文化が混雑する地である。民族的にはウクライナ人でも母語はロシア語という者も珍しくないし、前述のようにユダヤ人も多い（スサク氏自身もユダヤの血を引き、母語はロシア語である）。モスクワやペテルブルクで教育を受けた者も少なくない。だが驚いたことに、独立国としてのウクライナがまだ存在していなかった二十世紀初頭においても、パリではウクライナ出身者による芸術グループが形成され、彼らの作品を集めた展覧会が開催されていた。無論その一方で、マレーヴィチのようにウクライナ出身だが美術史的にはロシア・アヴァンギャルドという文脈に置かれるべき画家もいる。昨今のウクライナ情勢を見てもわかるように、この地におけるナショナル・アイデンティティーは一言でまとめられるほど単純ではない。だがその複雑さゆえにこそウクライナの豊潤な文化的土壌が存在するのではなからうか。政治に翻弄され混迷の度を増す現代ウクライナ社会も、エコール・ド・パリに鮮やかな足跡を残した多彩な芸術家たちも、同じウクライナの両面なのだと思うにはいられなかった。